

日銀の視点

愛知県の名古屋地域では、豪華な嫁入り家具を運ぶトラックが有名だが、所変われば文化も違うもので、アヤマ満開の6月の潮来では、嫁入り舟が運河を行く。花嫁の白無垢が静かな水面に映え、情緒を誘う。言うまでもなく現代においては初夏のイベントなのだが、道路が整備され、鉄道駅もある潮来で、かつては「水路」が生活の道であったことを物語るものだ。祭事も含め日々の生活がそこで展開されていたのだろう。

日銀水戸事務所長 稲見 征史

変化するみちのゆくえ

歴史に詳しい方から教えを受けたのは、「内川廻し」のことだ。江戸時代の物流は、東北から海上を運ばれてきた物資が那珂湊から那珂川を経て酒沼に入る。一部陸路をはさむが、その後は北浦や霞ヶ

浦を航行して利根川に至り、最後は川に沿って江戸まで輸送される水路が物流の中心であったという。水辺沿いに経済が発展した時期があり、潮来もその地域にある「水の都」の一つと言えよう。

今や本県の自家用車保有率は全国上位。県内には工場や物流センターも集積するなど、個人も企業の活動も「陸路」での移動が中心だが、引き続き水路も重要性が高い。北海道・道東から生乳など農畜産物が日立港まで船で運ば

れ、近くの高速度道路から首都圏へ新鮮なうちに供給される路（みち）が存在する。現代版の水路と陸路のハイブリッドと言えるが、本県の太平洋沿いの港が物流面で重要な役割を果たしていることを物語る事例だ。

一方、本県では「鉄路」の方も大きな変化があった。平成の時代に実現したつくばエクスプレス（TX）の東京からつくばまでの開通は、沿線の住宅・商業地の発展に貢献した。現在も開発は続き、県内でも稀有な人口増加地域となっている。鉄路が新たな経済圏を切り開いた現在進行形の事例だろう。

このように路は、地理的条件や時の政策などの影響を受けながら、維持されてきたものもある。衰退したもの、また、新たな路が形成されたものもある。果たして今後はどうなっていくのだろうか？

便利とされてきた陸路の方も、高齢化社会の中で、自家用車を中心とした生活には限界が見えている。広い可住地域の中で、高齢者がいかに円滑な移動や生活を確保するかが課題となっている。スマートフォンシティーやコンパクトシティの議論、その構想の下で、市街地や駅・市役所を結ぶ自動運転バスの運行なども進み始めている。技術進歩の恩恵も得つつ、どう変化していくのが今後の均衡点なのか、選択肢も多く、人々の生活のスタイルやニーズも多様化する中、まだ方向性は定まっていないのが現状だろう。